The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Interface humanities 02
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/13108
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイスの人文学 / Interface Humanities
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Interface Humanities

02

出来事は語られる

Contents

《特集》出来事は語られる

4 対談 未来に向けて〈出来事〉を語る
桃木至朗×渥美公秀　司会 本間直樹＋三谷研爾

語りのなかの出来事
4 産業革命はこのようにして語られた
川北 稔

ある出来事の記憶
7 "フィールドワーク"を超えて
栗本英世

構成される出来事
10 社会問題と物語
入江幸男

記録という出来事
12 行為（アクション）としてのドキュメンテーション
篠田暁子

現代（いま）を測る
21 感覚について対話するということ
高橋 綾

フィールドのざわめき
24 ホストと学生とのはざまで
木島由晶

人文学のフロンティア
28 イギリス小説の起源と『ロビンソン・クルーソー』
服部典之

31 編集後記

Feature: Event narrated

4 Event and Representation
Shiro MOMOKI / Tomohide ATSUMI / Naoki HOMMA / Kenji MITANI

4 Narratives of the Industrial Revolution
Minoru KAWAKITA

7 Beyond "Fieldwork"
Eisei KURIMOTO

10 Social Problems and Narration
Yukio IRIE

12 Documentation as Action
Akiko SHINODA

21 Dialogue on Visual Perceptions
Aya TAKAHASHI

24 Wavering between being a Student and working as a Bar boy
Yoshimasa KIJIMA

28 The Origins of the English Novel and *Robinson Crusoe*
Noriyuki HATTORI

31 Editorial Note

Interface Humanities

特集

出来事は語られる。

雨が降る、傷を負う、人が死ぬ…私たちのそばで、私たち自身のうちに、あるいは私たちの外部で、思いもかけず降りかかってくるもの。こうした〈出来事〉のレベルに位置するものは、しばしば人文学において「偶然的なもの」、「表層的なもの」、「私的なもの」として軽視されてきた。つまり、「それが起こった」という日常的な語りから離脱し、むしろ出来事の背景にあるとされる「社会的・歴史的構造」や「法則」、あるいは「必然的なもの」について語ることに多くが費やされてきた。それはまた、出来事のアクチュアリティや強烈さに鋭敏に応答し、それらを効果的に伝達し、あるいは出来事に積極的に参与して変革することが極めて生じにくい制度なりシステムを自ら作り上げているということを意味しないだろうか。

それにしても、あることを出来事として名指し、それを記述することはどういうことなのだろうか？ 出来事を記憶し伝えることの意味とは何だろうか？ 社会において出来事とはいかに表象・表現され、かつ解釈されるのか？ 人文学が人間の文化としての記憶・記録のシステムの一部を担っているとすれば、そのようなシステムにおいて出来事はいかなる位置を持つことができる／できないのか？ そして、出来事の発生する次元に対して人文学はどのような関係をもつことができるのか？ ―これらの問いたちに出来事についてのそれぞれの〈語り〉が応えはじめる。

語りのなかの出来事

産業革命はこのようにして語られた

川北稔

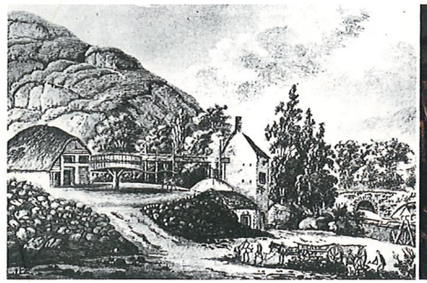
事件と構造

フランス革命や世界大戦のような、「事件」の連続として語られがちであった歴史を、「長期持続」する「構造」としてとらえる傾向は、社会経済史や社会史を中心にさまざまなタイプの歴史学において、過去数十年間、圧倒的優位を占めてきた。しかし、「事件」と「構造」の区別はそれほど簡単ではない。それに、特定の「事件」が、人びとの集団的記憶として「構造」化されることもありうる。「事件」と「構造」を二者択一的な対立概念ととらえることは間違いである。

イギリス産業革命といえば、教科書的には何の変哲もない「事件」であるが、研究者の間では、そもそもそのような「出来事」そのものが存在したのかどうかについて、つねに強い疑念が表明されてきた。産業革命の存在を認める場合でも、それがどのような「事件」であったのかについては、研究者のおかれた状況によって、さまざまな言説が交わされてきた。産業革命は、「革命」であるとすれば、「事件」の一種とみなければならないが、工業化と言い換えれば、たちまちそれは農業社会から工業社会への「構造転換」そのものをさす言葉となる。「産業革命」ではなく、「産業革命論」の歴史をテーマとする論文が、無数に書かれているゆえんである。つまり、「産業革命」がどのように論じられてきたかという歴史である。私自身、すでに何度かそのような概念史整理のようなことを試みたことがある。

そもそも産業革命という用語は、エンゲルスによって、初めて本格的にもちいられた。かねてこの用語の創始者としてはアーノルド・トインビー（『歴史の研究』の著者の同姓同名の伯父で社会改良家）の名前があげられてきたが、それが反マルクス主義的なイギリス知識人層の屈折したメンタリティに由来する歪曲であることは、D.C.コールマンが晩年の論文で喝破した。ともあれ、この言葉は、それが使われるようになった当初から、客観的な歴史的事実というよりは、社会の現状にたいする厳しい批判を支える「言説」として成立したのである。つまり、実際には、社会の構造転換について語っていながら、「革命」という「事件」性を想定させるタームをもちいたことが、この言葉の以後の有為転変の根本原因であると思われる。

それにしても、どれほど固い「産業革命」擁護派であっても、それが分割不能な単一の「出来事」であったという人はいないだろう。少なくとも、綿工場の成立と鉄道の普及とは別々の出来事であって、それら



（左）ウェールズの炭坑（1798年）
イギリス産業革命のひとつの中心となったウェールズのニース炭坑。藁屋根のなかに坑道の入口があり、馬がひく巨大な車輪に巻き取られるロープで、石炭を運び出すことになっている。（出典：Welsh Coal Mines, National Musuem of Wales, 1976）

（右）夜のコールブルックデイル
コークスによる製鉄法を開発したダービー家の工場。1800年頃の風景。初期には、産業革命の現場が絵画の素材になることは、比較的少なかった。（P. J. de Loutherbourg, *Coalbrookdale at Night* Science Museum London 所蔵）

語り手　「革命」という「言説」　歴史的事実　事件　産業革命　集団的記憶　長期持続　歴史学

観察者　対象　「私」　ハプニング　偶然と必然　構造転換　history　構造

対談

未来に向けて〈出来事〉を語る

渥美公秀 × 桃木至朗

【司会】本間直樹 ＋ 三谷研爾

出来事にかかわること

本間：〈出来事〉にはさまざまな層や次元があります。日常のありふれたもの、突発的なもの、多くのひとを巻き込むもの、そして時代を画するもの、あるいは自然哲学や存在論の概念によって指し示されるもの。いずれにしても出来事は、人びとを否応なく巻き込み、呼び寄せ、語り継がれ、また新たな出来事を招き寄せます。つまり出来事は人びとをダイレクトに動かし、巻き込むだけでなく、それが言葉や記憶を含む何らかの情報メディアを介することによって、通時的にも共時的にも複合的な影響や伝播を生じさせます。すべての出来事はそれ自身に固有な時間や周期をもち、歴史なるものを構成しています。学問研究と呼ばれるものは、こうした出来事のダイナミズムにどのように関わっているのでしょうか。

桃木：歴史学における正統派の方法論のなかでは、出来事というものは軽んじられてきました。しかし、受験教育などアカデミズムの外で教えられる歴史のなかでは、出来事はとても大事なわけです。にもかかわらず歴史学は、学問として自分をまわりから区別するために、出来事の研究は初歩的なものであって、「構造」や「流れ」など、もっと上等な研究がその先にはあるのだということを主張し続けてきたといえます。

しかし今や、かつての発展史観に見られたように歴史学が「必然を解き明かす学問である」ということを誰も信じなくなった。ならば、出来事―ハプニングをどう位置づけるかを考えなければならないのですが、まだ十分に考えられていないのが現状です。

渥美：私の専門はグループダイナミクスです。そこでは、研究者と対象の間に一線を画せないという点が最も重要だと考えています。それは従来認められなかったのですが、われわれは研究者が出来事を変えてしまうところまで突き進んでいます。従来の心理学ですと、そこに実験者がいることをどんどん削ぎ落とそうとしましたし、論文でも実験者が実験操作以外に何を行ったのかということにはまったく触れなかったのですが、それらに対する反省から出発する分野です。「私」という主語を伴って成果が出されるので、出来事も「私」といっしょに起こっていると考えます。その時に歴史というものにうまく取り組めるかどうかわりませんが、過去の出来事であっても、それは

を「一連の事件」とみるのは、かなり無理がある。つまり、「産業革命」は、それ自体、出来事の集積であって、どの範囲の出来事を一括してとらえるかは、語り手の立場の表明でしかない。

産業革命の語られ方

かつて産業革命は、イギリス民衆の生活の質を低下させた元凶として、したがってまた、社会改良を不可避とする前提条件として語られた。一八世紀末のイギリスには、「産業革命」という革命的な変化があり、しかも、その結果、イギリス民衆の生活状態は著しく悪化した、というのが、伝統的な産業革命論の骨子であった。断絶説ないし悲観説と呼ばれるゆえんである。

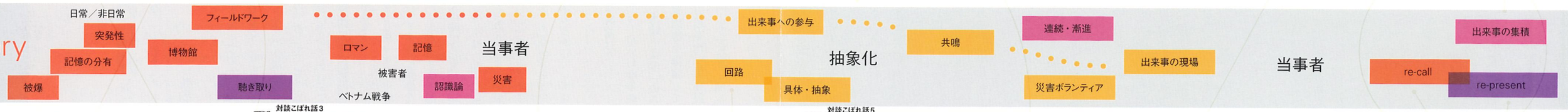
これに対して、一九二七年にJ・H・クラパムが、労働者の生活水準の上昇を主張していらい、このような見方とは正反対の楽観説、連続説がイギリスでは一般化していった。つまり、「産業革命」の結果、民衆の生活はよくなったのであり、しかも、そもそも歴史上、「革命」というほど劇的な変化はなく、すべては連続的、漸進的に進んだのだという主張である。伝統的な産業革命論を、提唱者の名前をとって、「トインビー神話」・「ハモンド伝説」として一蹴したのは、とくにオクスフォードの論客R・M・ハートウェルであった。こうなると、産業革命は、地球上の諸国を、開発された豊かな国と低開発に悩む貧しい国とに分かつ分水嶺として、むしろ「豊かさへの入り口」としてみられるようになった。

同時にかつては、イギリス人の発明の才や勤勉がもたらしたものとみられた産業革命そのものが、過去の帝国主義支配への批判が当然のこととなったいまでは、黒人奴隷やインド人農民、アイルランド人労働者の血と汗の結晶であったことも確認されている。トリニダード・トバゴの独立運動を指導し、独立後最初の首相となったエリック・ウィリアムズの産業革命論（『資本主義と奴隷制』）は、まさにそのようなものである。第二次世界大戦前、世界が大恐慌の波に飲み込まれ時代には、産業革命もまた、景気変動と失業の問題としてとらえられがちであった。

上述のコールマンは、そもそもエンゲルスの議論からして、「産業革命」はリアリティよりはロマンとして語られてきた、としている。彼はまた、イギリスが目立った工業を失ったいま、「産業革命」はついにロマンティックな観光資源となりつつある、ともいう。SL趣味やイギリス全土に無数につくられた産業考古学博物館の世界である。もはや、これまでのように、「産業革命」にかかわる言説を利用して、現実世界の問題を語ることが困難になってきたということかもしれない。

こんにち、概念のもつ「革命性」を維持しようとする人びとが、「産業革命論のリハビリ」の必要性を叫ぶ一方、「革命」不在説のいきつくところは、「産業革命」の成果とされがちな「近代的経済システム」は、すでに一七世紀のオランダで成立していたとか、中世にさえその根源があった、という極論にまでいきついている（J. L.van Zanden, "The "Revolt of the Early Modernists" and the "first modern economy": an assessment', *Economic History Review*,

アイアン・ブリッジ
コークスによる製鉄法を発明し、産業革命を決定的に進めたエイバラハム・ダービー一族が建造した世界で最初の鉄橋。西部のセヴァーン河にかかっていて、このあたりは地名もアイアン・ブリッジという。ダービー博物館が隣接している。



ある出来事の記憶

"フィールドワーク"を越えて

栗本英世

フィールドワーク中の人類学者にとって出来事はおおきな意味をもっている。どの社会でも毎日の日常生活は、ほぼおなじことのくりかえしである。もちろん、こうした生活のリズムを知り、身につけることもフィールドワークの第一歩である。しかし、日常の平穏を乱すような出来事によって、つね日頃はみえないものが突如あらわになる瞬間は、フィールドワークの醍醐味ともいえる興奮を呼び起こす。

今から二〇年前、一九八三年の一月は

対談こぼれ話3
「聴き取り」場面の不自然さ

対談こぼれ話5
現場と現場をつなぐもの：「○○と言わない○○」

今、私が関係している出来事だという枠組みがないかと模索しているところです。したがって、動機や記憶も過去にあったことを思い出す―re-caｌｌではなく、今から未来に向けて出来事を作っていく―re-presentするというスタイルを取っています。

本間：出来事について研究し、研究した成果が公表され、それが別の研究や人たちを触発すると考えるならば、その研究者はある意味で出来事の一部となってしまっていることになります。また逆に、出来事の研究の中であまりにも自分が当事者であるがゆえに、物事を客観的に記述できない、近すぎるがゆえに出来事自身が見えないというパラドクスがあると思います。そもそも出来事にかかわることにどのような意味があるのでしょうか？

渥美：出来事の現場に研究者として入る場合には、そこで起こったことをたんに紙に残すだけでなく、一歩抽象化することを目指さなければいけません。現場で発言するときには、分かりやすい言葉でありながら一歩抽象化した言葉で話す。たとえば災害のボランティアの現場に行って、そこにいる人たちと話したひとことが別の現場でも使えるかもしれない―これが抽象化することです。災害現場のあるフレーズが、山間過疎地の活性化の現場で、また介護の現場で「なるほど」と言っていただけるかどうか。つまりある現場で、われわれが一歩抽象化し見つけたフレーズが、よその現場で共鳴してもらえるかどうかを求めるわけです。その回路として研究者を使ってもらえたら。現場はもちろん、学会などで発表すれば、抽象を経由して、他の活動へと具体的につながっていける。具体―抽象―具体の繰り返しをやる。その回路の中に立とうというのがひとつです。

また、災害など被害に遭われた人に何かできないか―たとえば、その人たちの辛い思い出、頑張った思いなどを将来に伝えるという場合、たんに過去の歴史の一部に書き加えるのではなく、今まさに出来事として歴史のひとコマとして動いているものとして、誰のために、どのように残していけばよいのかを考えなければなりません。出来事に向かう時には、当事者のために何かできないか、そこから超えるための抽象化の回路を開けないかという気持ちで現場に挑んでいます。

桃木：認識論的な問題も含めて出来事をどう語っていくか、どう記憶していくか、どう再構成していくかということは決定的に大事なことだと思いますし、それなしにいくら学者が構造や時代の流れを語ってもなんの意味もない。そこで、歴史学でも現代史については、聴き取り調査をおこなうようになりました。最近の例では、ベトナムの独立戦争前後の出来事であればわりと聴き取りができる。それ以前については、ほとんど文献でしかたどれない状況になりますが、いくつかの出来事を中心にして語られていくことに、われわれがどう食い込んでいくのかが勝負になります。

出来事の記憶とその分有

渥美：広島の博物館に行くと、「しまってはいけない記憶」という言葉を使って、被爆された方々の語りや書かれたものが残されていま

LX-4,2002)。こうなると、もはや「産業革命」に「事件」性はありえない。

歴史学の消滅か

ここまでくると、「事件史」と「構造史」の弁別などは、とうてい不可能である。便宜的な言説としてつくり出された「産業革命」は、あまりにも便利で、あまりにも様々な目的に利用された結果、もはやリハビリが困難なところまで傷ついてしまったというべきであろう。

かくて、「産業革命」という概念は、いまや、「ほかに表現のしようのない、ひとつの複雑な事象にかかわるメタファー」であるという以外になくなった。「歴史家は事実を求め、社会は神話を求める」（コールマン）といわれたのは一〇年まえのことである。しかし、いまや産業革命を扱う歴史家自身もまた「事実」の追求は断念し、というより、「事実」の存在そのものに懐疑的となり、「どう語られたか」、「どう記憶されたか」だけを問題にしようとしている。いわゆる「言語論的転回」の結果として、歴史学は消滅し、史学史だけが生き残る病的な現象がここにある。

キーワードを読み解くためのブックガイド 1

パット・ハドソン『産業革命』（未来社、1999）

P・オブライエン「産業革命論の現在」（『西洋史学』183号、日本西洋史学会、1996）

川北稔「近代世界と産業革命・市民革命」（『歴史学における方法的転回』青木書店、2002）

川北稔（かわきた・みのる）

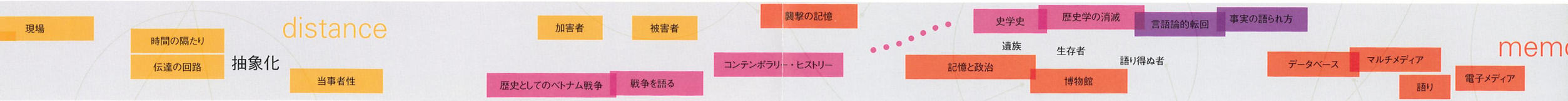
1940年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程中途退学。文学博士（大阪大学）。大阪女子大学などをへて大阪大学大学院文学研究科教授。附属図書館長。著書に、『工業化の歴史的前提』（岩波書店）、『民衆の大英帝国』（岩波書店）、『砂糖の世界史』（岩波書店）、『アジアと欧米世界』（中央公論社）など。

じめ、私は南部スーダンの村にいた。前年からパリと自称する民族集団の調査を続けていたのである。これは二度目のフィールドワークで、知り合いも増え、パリ語もだんだんわかるようになって、充実した毎日を過ごしていた。三日の夜八時ころ、私は当時寝泊りしていた村はずれの小学校の教員用住居で夕涼みをしていた。乾季のさかりで、蚊も少なく心地よい風が吹いている。突然、村のほうが騒がしくなった。叫び声や泣き声が聞こえる。太鼓が叩かれ、宿舎の前の道を槍を手にした男たちが足早に通りすぎていく。話しによると、ブラ集落のアンメル放牧キャンプが、武装したロピット人に襲撃されたらしい。すくなくとも二人の少年が槍で刺されたという。のこりの少年たちと牛の安否はわからない。

パリの人たちは農耕、牧畜、狩猟、漁撈と採集によって生計を立てている。乾季になると牛は村を離れ、水と牧草を求めてキャンプに移動する。少年たちはキャンプに滞在して牛の世話をするのである。アンメルは、村から徒歩二時間ほどの川沿いにあり、五、六〇〇頭の牛がいた。南部スーダンのこの地域では、他民族集団による牛の掠奪はしばしば発生する。現に一二月にはパリの東方に住むトポサという牧畜民の一団が、西方の白ナイル河畔まで約三〇〇キロメートル遠征し、ディンカ人の牛数百頭を奪い、追撃した警官隊と銃撃戦になるという派手な事件が発生したばかりだった。このとき、警官隊はトポサの巧妙な待ち伏せ攻撃にあい、二八名が死亡しほぼ全滅した。トポサ人はウガンダから流入した自動小銃で武装しているのである。しかし、パリ人に限ると、過去十数年襲撃されたことはなかった。また、当時銃はまだそれほど浸透しておらず、パリの放牧キャンプは丸腰の無防備な状態だったのである。とくに三日は殺人事件の調停の最後を飾る、賠償の牛一五頭を加害者側から被害者側に引き渡すおおきな儀礼があり、男たちの多数は酔いつぶれていたのである。襲撃者はこうした情報も事前に知っていたのだろうか。

三日の夜、九時すぎになっても男たちの列は続いていた。二、三本の槍を手にもつほかはきわめて軽装である。上半身は裸で短パン姿がおおい。男たちは二手に分かれて襲撃者と奪われた牛を追跡するらしい。一一時前、村長（行政首長）から、けが人を一〇〇キロメートル離れたトリットの町まで私の車で運んでほしいとの依頼を受ける。小学校の一室にある診療所には、傷ついた少年二人と若者二名が運びこまれていた。ベッドも医療機材もない部屋は、ランプの薄明かりに照らされ、血の匂いが充満していた。医療助手の男が、右胸から脇腹にかけて槍による裂傷を負った少年の手当てをしている。痛みに耐えかねる少年を数名で押さえつけ、麻酔なしで傷を縫いつけていた。もっとも重傷なのは、背中から腹に弾丸が貫通した若者であった。すでに二名が死亡したと聞く。

私たちのピックアップ型ランドクルーザーは、負傷者たちと村長を乗せて夜中の二時前に出発した。夜道の運転ははじめてである。四時に町に着き負傷者を病院に運びんだ。この日は二時間仮眠したあと、役所で状況報告をして夕方に村に



対談こぼれ話2「コメモレイション」

す。大変優れた展示だと思います。しかし「誰が」「何のために残すのか」が問題です。

桃木：歴史学はかつてなら「平和」や「民衆」のためと言えたわけですが、今はそれではちょっと具合が悪くなりまして、本当に悩んでいるというのが正直なところです。

渥美：館内には圧倒的な資料と語りがあって、電子メディアを使って聞けるようになっているわけですが、何が伝わっているのか、またわれわれは何を持って帰ったらいいのか、第三者としてそういうものをどう見たらよいのかと大変とまどう思いがあります。その意味を私はうまく消化しきれなかった。

ベトナムでも亡くなられた方がいらっしゃるので同じだと思いますが、死者は死んでおられるので語れない。生き残られた方の語りは集められるわけですが、一番無念な思いをされているのは亡くなられた方ですよね。そういうところは資料を整理されるときにはどのように取り込まれているのですか？

桃木：ベトナムにおいても、オフィシャルには客観的な体験の継承ということが言われていて、その博物館が作られたり、教育現場でも教えられたりしています。ところがそれと遺族の感情とがずれていることがあります。また別の面では、亡くなった本人ではない遺族が、ある種ポリティカルなことも含めて、力を持っています。そういう部分は日本においても疑問に感じる。それとともにベトナムでも、戦争で死んだ人を国がまつらなければならない、そうしなければ政権がもたないということがあります。ですが、そういうものに回収されない部分をどう捉えていくのかということは、議論が始まったばかりの問題なのです。

出来事との距離

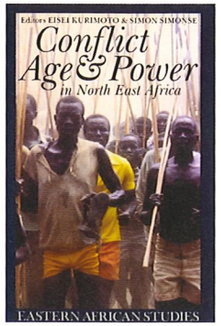
桃木：コンテンポラリー・ヒストリーが学として認められるようになったのはつい二、三〇年前のことです。そのひとつとして、ベトナム戦争についての語りというものがあり、戦中、戦後についていろいろな本が出されています。その中で非常に印象的だったのは、一九九一年に『歴史としてのベトナム戦争』という本が日本から出されたことです。内容上も歴史学者の誰が見ても「これは歴史だ」というベトナム戦争の記述が出てきたのは、そこからでしょうね。海外でもようやくその頃から、同種のものが出てきた。そういう意味では、本当のコンテンポラリー・ヒストリーというのは矛盾があって、成り立たないのかなとも思います。そこにはいくつか段階があって、事柄によっては一世代ぐらいたたないといけないこともあるのかなという気がします。記録の公開や記憶にもかかわって、時間がたたないと歴史にはならない。当事者自身のものとは異なる語り方ができるようになる、抽象化した語りが体系的にできるようになることが、歴史には必要だと思います。

本間：これまでのお話で、渥美先生はある現場に参加した者が伝達の回路となって別の現場に接ぎ木することが必要であると、また桃木先生は、歴史として対象とするためには時間の隔たりが必要であるとおっしゃいました。私は臨床哲学というものにかかわっており、そこで「現場性」とは何かを数年議論してきましたが、ある現場の活動を見て

構成される出来事

社会問題と物語

入江幸男



新年の儀礼的狩猟を終え、隊列を組み、歌を歌いながら村に戻ってきたパリの男たち
(E. Kurimoto & S. Simonse, (eds.) *Conflict, Age & Power in North East Africa: Age Systems in Transition*, James Currey, Oxford 1998の表紙)

私たちの社会は多くの社会問題を抱えています。実は、社会は社会統合のためにつねに〈社会問題〉を必要としているのではないかと思われます。社会問題は、その社会に課題を与え、方向を与えます。それによって、社会は、ひとつの物語を共有することになります。(もちろん、社会がひとつの物語を共有する仕方は、社会問題にかぎらないかもしれません。)

私たちは、テレビや新聞を通して多くの社会的な出来事を知ります。そして、その様々な出来事を、ほとんど無意識のうちに、社会のなかに位置づけて理解しています。そのとき私たちは、それを社会問題に関係づけて理解していることが多いように思われます。たとえば、失業者が通行人を無差別に刺すという事件があると、それを失業問題とか犯罪の増加という社会問題の「現れ」や「一事例」として「解釈」します。

そして、そのように適切に解釈できない出来事に遭遇すると、しばしば社会はパニックになり、性急な解釈が無理やりに求められたりします。たとえば、神戸の連続児童殺傷事件がそうでしたし、最近ではSARS騒動に、それが見られます。ちなみに「パニック(panic)」とは、「牧神(Pan)が引き起こす出来事」という意味のようです。出来事をうまく理解することができないとき、私たちは、「牧神」を引き合いに出してまでも、とにかく出来事を理解せずにはおれない存在なのでしょう。

逆に、同じような出来事が頻発することによって、はじめてその出来事が社会問題として見えてくるということもありま戻った。五日になると疲れ果てた追跡者が村に戻りはじめた。北東方向に約五〇キロメートル、足跡を追跡したが追いつけなかったという。逃げた方向からして、犯人はロピット人ではないのではという噂が流れはじめる。町に運んだ負傷者のうち、貫通創を負った若者が遺体になって村に戻ってきた。電気も手術の設備もない病院では、処置のしようがなかっただろう。

六日と一六日には、パリの六集落全部の男たち約千名が参加した全体会議が村はずれの木の下で開催された。「ただちにロピットを襲撃し報復する」というブラ集落の意見は退けられ、密偵の派遣と小銃と弾薬の入手が決定された。一方、ブラの男たちは、この災厄の原因を議論し、前年に死んだ二人の男の呪詛のせいであるという結論に達した。彼らの墓はあばかれ、遺骸は村の外で焼き捨てられた。一七日には、掠奪された牛の一部がトポサ人の地で発見されたという知らせが届く。事件発生から二週間をへて、ようやく襲撃者が特定されたのである。

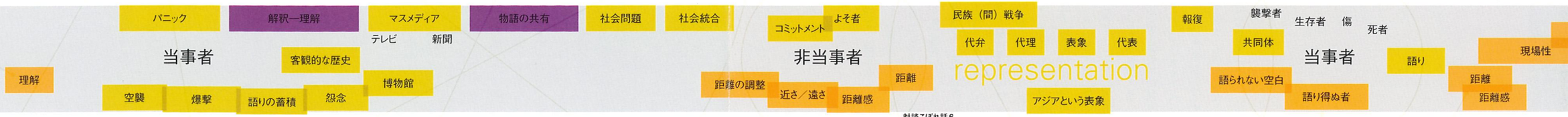
この襲撃・掠奪という出来事は、非常事態のもとで社会の政治と軍事がいかに動いていくのかをまのあたりにする機会になった。ひとつの共同体、政体としてのまとまりとともに、集落間の対立も露呈したのである。地方政府や警察の無力さも実感した。また、よそ者ではあるが村で生活するものとして、こうした事態にどうコミットしたらよいのか、するべきなのかを考えさせられる契機にもなった。一九八三年以降、パリ人は民族集団間の襲撃と掠奪、そして全面的な内戦というおおきな時代のうねりのなかに巻きこまれていくことになる。今から思うと、この出来事はその開始を告げる事件だったのである。

キーワードを読み解くためのブックガイド 2

栗本英世『民族紛争を生きる人びと』
(世界思想社、1996)

栗本英世(くりもと・えいせい)

1957年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。東京外国語大学、国立民族学博物館をへて大阪大学大学院人間科学研究科教授(人類学)。著書に、『未開の戦争、現代の戦争』(岩波書店)、『民族紛争を生きる人びと—現代アフリカの国家とマイノリティ』(世界思想社)。編著書に、『植民地経験—人類学と歴史学からのアプローチ』(人文書院)、*Remapping Ethiopia* (James Currey)など。



対談こぼれ話6
「おまえは当事者ではない」

語りの複数性

渥美:最近、東京大空襲の戦災資料センターというところに行きました。大空襲のことは他の博物館でも紹介されていますが、施設によっては随分と雰囲気が違います。いわゆる客観的な歴史が示されているような所もあれば、このセンターのように怨念がこもっている。そこでもまた厖大な量の語りがあって、お子さんが三人亡くなったとかいう自筆のものが残っていたり。また、来館して「自分がどう大変だったか」ということをしゃべる場になっているそうです。われわれは大阪からそこに行き、どういう風に爆撃されたかを、その場で初めて知る。本当の当事者もその日にどう爆撃されたかなんてその日には分からないので、今になってこのセンターで初めて、こういうエリアが空襲にあいましたと聞かされるわけです。東京大空襲は大きな出来事ですが、では、時と場所の違う私たちはどう理解していくべきなのか、どうかかわっていいのか、やはり距離の取り方に悩みつつ帰ってきました。

いくとき、そこで何が起きているのか、それがどうなるのかを語るのは必ずしもそこにいる人だけではないだろうと思っています。そこに共通しているのは、当事者そのままの語りではない語りの可能性です。そこではたんに時間的な隔たりだけではなく、抽象的な意味での距離が現場に対して必要だと。

ではこの距離ないし距離感とは何でしょうか。具体的に言えば、亡くなった方の語りはどうしても不在で、その不在を埋める別の語りがあって、それが力を持ち、現場を支配する。こうした語りの現在性、誰が語るのかということにどうしても密着して起こってしまう欠落というか、語り得ぬ者、語られない空白の場所にむしろ当事者でないものがそこに関与し得るということがあるのでしょうか?

桃木:われわれの分野でも、純粋客観主義の時代は別にして、その問題をめぐって揺れ動いてきました。私が専門とする東洋史の場合には、アジアという表象をどう考えるかという歴史学特有の問題も混ざっていて、たとえば「アジアの民衆の立場に立つ」ということをめぐってさんざん論争が繰り返された。アジアの民衆の代弁をするのが学者であるというようなことが非常に安直に言われたことに対する批判がありました。では学者がかかわる意味はどこにあるかというと、当事者とピンポンをすることによって、何らかの助けになるのかなと思いますね。ピンポンの仕方についても皆悩みながらやってきている。

渥美:距離感というのは大変いいまとめだと思います。時間的・空間的、あるいは論理的に距離がある。学者としてそのあるなしを言うのではなくて、うまくそれに乗って、近寄ったり遠ざかったりする運動を考えたいと思っています。災害の現場ですと、被災直後は距離とか言っている余裕は全然ないわけですから、その場に居合わせることしかできない。または一緒の風景の中に佇むことしかできません。ただそんないろいろなことが後になって、距離を調整するときの糧になるのではないでしょうか。注意しておきたいのは、被災されたかたの代弁は無理だということです。

す。このとき、出来事は社会問題の存在を「証示」するものです。この出来事は、当初はたんなる偶然の出来事とか個人的な出来事などとして解釈されたのでしょう。しかし、あるときから社会問題として解釈され、その〈社会問題〉が社会的に「構成」されるのです。たとえば、近年になって社会問題として認知された「児童虐待」「家庭内暴力」などが、この例になるでしょう。「出来事」と「社会問題」のこのような関係は、さらに「社会運動」や「社会制度」を含めた下のような見取り図の中に整理できるかもしれません。

私たちが出来事を理解するとき、私たちは、物語形式でそれを理解しています。たとえば、交通事故について警官に説明するとき、「本線に出ようとして、後方確認をちゃんとしたんです。いや、したつもりだったんですが、いざ右に出ようとすると、いきなり後ろからあの車がやってきて、それの後部ドアに私の車が当たってしまったんです」などと説明します。つまり出来事を説明しようとすると、それが起った経緯を物語ることになるのです。というのも、出来事にはたいてい始まりと中間と終わりがあるのですが、この始まりと中間と終わりがあることは、物語の基本構造でもあるからです。

ところでひとつの出来事は、より大きな物語の中にその部分として組み込まれます。それが出来たときに初めて、その出来事を理解したという気になります。たとえば、ある量販店の業績悪化のニュースは、かつてすごい勢いで急成長したその会社の成長と没落の物語として理解されますが、しかし、それは日本経済の現在の不況や、戦後の日本経済の成功と没落の物語というより大きな物語の一部、一事例、証拠、兆候、現象、などとして解釈されることになります。この大きな物語は、冷戦後の世界経済のグローバル化、などの更により大きな物語の中に組み込まれて解釈されることでしょう。

このように、出来事は、社会変化についてのある物語の中に組込まれて〈解釈〉されます。逆に、社会変化についての大きな物語は、具体的な出来事の中にその〈証拠〉を見出すのです。では、これらの多くの物語は、次第により大きな物語の中に包摂され、最終的に究極のひとつの大きな物語の中に包摂されるのでしょうか。いまのところ、そういうことにはなっていません。では、どうなっているのでしょうか。

ある出来事を物語るとき、起こったことをすべて語ることは出来ません（仮に出来たとしても、それでは物語にはなりませんし、出来事の理解や説明にはなりません。）私達は、物語において、起こったことの一部を語るだけです。ですから、どの部分をどのように語るか（どの部分と結びつけて語るか）の違いによって、複数の物語が可能になります。ここに物語の抗争が生まれます。この物語の抗争は、個人同士の関係の中にも、集団や組織の中

記録という出来事

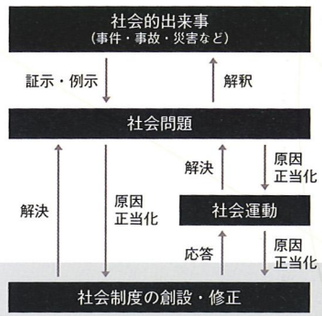
行為（アクション）としてのドキュメンテーション

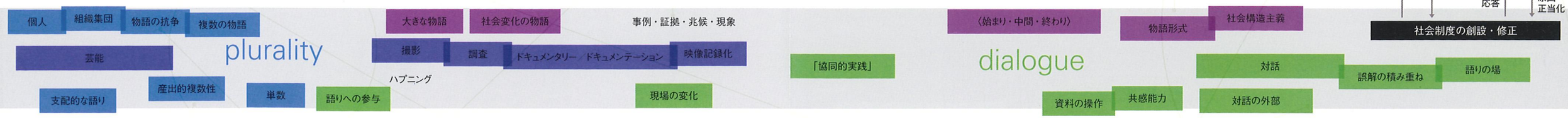
篠田暁子

昨年より「RVMV（ベトナム少数民族無形文化遺産調査・映像記録化および人材育成プロジェクト）」に参加している。その主な目的は、ベトナム少数民族の音楽や舞踊等を日越共同で映像記録化し、「文化のドキュメンテーション」をつくることにある。

この事業の鍵は「ドキュメンテーション」という聞き慣れない言葉にある。テレビ等で観る「ドキュメンタリー」というものが、事実を装いつつも作り手の意図によって脚色されているのにたいし、「ドキュメンテーション」とは作為を排除した事実の記録である、というのがその定義である。だが実際、調査班はあくまで調査班として村を訪れ、相応の待遇を受けつつ、所定の期間内で「鑑賞に堪え得る」成果を仕上るため、村人を巻き込みながら尽力する。理念と現実との隔たり。これが参加者たちの心にさまざまな疑問を残したようだ。しかし事業の目的には「若手人材の育成」も含まれていて、むしろ実践を通して各自に「ドキュメンテーション」のあるべき形を考えさせることこそ、狙いなのかもしれない。

私が今回こうした点を根本的に考えさせられたのは、撮影時のあるハプニングの瞬間だった。私の班が訪れた村では、人びとは自然に即した生活を送っていた。つまり炊事はすべて薪でおこない、夜には電燈もテレビもない。こんな彼らの質素な生活において、私たちの「調査」や「撮影」という行為は、かなり画期的な出来事だったようだ。ともかく私たちは撮影にさいし、特に再現風のセッティングをせず、村のいろいろな芸能を一箇所に集めて撮影す





三谷：さきほどのボランティアのお話でもそうなのですが、私たちは当事者でありえないという場合が圧倒的に多いわけです。当事者でないとき、私たちは一体どういうふうに向き合うのでしょうか？

渥美：変な言い方ですが「黙って向き合う」としかいいようがないんです。語れないものは語れない。ただ、語りの場が開かれてくるとふと「私の時はこうだった」という当事者でないと分からない話が出る。しかし聴く方は九十九パーセントが当事者でないので、そこからどう抽象化するか、一般に通じることばにできるかどうかを模索しています。それは誤解の積み重ねなんです。お互いに誤解しながらずっと分かったつもりできて、やっぱり誤解だったと、振り出しに戻って対話を続けることしか、われわれにはできないのかなと思っています。ただ、やはり対話の場面の当事者でない人、つまりそこにいない人もいて、これをどうするかがまた問題です。

三谷：研究主体が当事者性を持たない対象にどうアプローチしているかという根拠は以前からふたつ言われています。ひとつは共感能力があること、もうひとつは歴史学などで洗練されてきている資料の操作技法ですね。さまざまなデータを操作することで、対象に肉迫することができる。その操作性というものは、より洗練することができるわけです。後者は一種の科学性なり方法論の基盤です。

従来はその両方を背景に持っているから、対象に接近できるという議論でした。ところが今やその両方に対して、どれほど根拠があるのかが問われるわけです。まさにそこが伝統的な人文学に向けられている批判でもあるわけです。

渥美：われわれの分野では「協同的実践」という言葉を使っていまして、これは凄く過激なものからそうでないものまであるのですが、一番過激なものは研究者が入ったことによって現場を当然変えていくのだとなる。基本的には研究者と現場の当事者が一緒になって、できれば当事者さえも気づいていないことに気づけるようにいろいろな言説をつくりだす。そうすることで現場が変われば ハッピーだ。私はこういうスタイルに近いかたちで現場にかかわっています。ところが当事者が「それは違う」と言った場合に、それを受け容れる必要があるかどうかは重要です。やっぱりそこで、研究者と当事者が話し合って、目標なりを一緒に作って、それぞれの持ち味を交わしていく。そういう風なことをやっていければと思います。

本間：問題は、ただ語りを拝聴するのではなく、語りにどう加わっていくのかということですね。語り手が生きている限り、常に文句を言われ、どんなに忠実に再現しようとしても、それは違うということが永遠に続く。つまり、出来事についての語りは単数ではなくつねにすでに複数であって、それはたんに数が多いというだけでなく、そのつど生み出されるということですね。たとえば震災で何があったかということの可能な語りの集合は無限にある。その中に第三者が含まれてもいいような、未来向けて産出される複数性があるのではないでしょうか。しかし、支配的な語りがこうした語りの複数性を抑圧してしまうことがある。

にも、時には気付かれないままに、時にはハッキリと、存在しているでしょう。そして、この抗争は、一人の人間の中にもあります。

私たちは個人としても集団としても、さまざまな希望や欲望、将来に対する見通し、現状や過去についての認識、を持っています。それらを説明しようとするとたいていは物語形式になるはずです。そして、これらの欲望や認識は、しばしば矛盾し合います。私達が抱えている個人的な問題も社会問題もこのような矛盾から生まれてきます。

ところで、社会問題を説明しようとすると、これもまたおそらくは、始まりと中間と終わりからなる物語になるでしょう。ただし、社会問題が、現在の問題であるときには、その物語は未完の物語、物語の半製品です。つまり、私たちの世界には、互いに矛盾したりすれ違ったりする物語の半製品があふれているのです。

ることにした。短い期間ではそれら本来の文脈に立ち会うことは不可能だ。村人もこの事情を理解し、会場の提供から演じ手集めまで快く協力してくれた。何よりも、私たちの行為に予測不能な興味を覚えたのかもしれない。撮影会場は見物に来た村人で溢れた。ここまではすべて順調に進んだ。

だが、最初の演目であるシャーマンの祈祷の撮影で、状況は一変した。撮影開始の合図で、シャーマンの装束をまとった二名の男性がおずおずと祈祷文を吟じ始める。しかし、どうも様子がおかしい。そのうち二人の声は次第にか細くなり、途切れ、ついに黙ってその場にしゃがみ込んでしまった。撮影を一旦中断し、スタッフが駆け寄ってわけを聞くと、頭を抱えたまま「神の祟りが怖い」という。つまり、彼らはカメラのまえに立ったものの、いざ演じてみると、儀礼の場以外で宗教行為を行うことにたいする罪悪感に耐えられなくなったのだ。予想外の展開に混乱する撮影現場。だがその時私は、目に見えぬ存在に怯える彼らの姿に強烈なリアリティーを感じ、静かに興奮した。それはおそらく、私だけではなかっただろう。

じつは、この村はかなり文化の中央化が進んでおり、撮影素材を集める段階で苦労した。伝統文化など形骸化しているのではと危惧したりもした。しかし、この予期せぬ出来事の瞬間、彼らの「生きた文化」を垣間見た気がしたのだ。もっとも、この感覚はいまだ私のなかでたんなる強烈な印象としての域を出ない。彼らが恐れるものがどんな存在で、実生活とどう関係しているのか。また私たち調査者の存在や、未知の「撮影」という出来事が、人びとの心や文化にどう影響したのか。そんな理解に至る間もなく村を発った。

「ドキュメンテーション」なるものを、記述行為によって真実を脚色なく生き生きと伝えることだと考えるなら、ジョルジュ・コンドミナス（Georges Condominas, 1921〜）の『森を食べる人々――ベトナム高地、ムノング・ガル族のサル・ルク村で石の精霊ゴオの森を食べた年の記録』は、文章による優れた文化のドキュメンテーションだろう。今回ベトナムに行くまえに読んだが、帰国後に再び読むとさらに奥深い。この焼畑農耕を営むムノング・ガル族の民族誌において、著者は個人的解釈を極力排しながら、文化の正確かつ緻密な描写に徹した。だが何よりもこの民族誌に厚みをもたせているのは、執筆のさいに情緒的表現を避けながらも、実際の調査では人びとの生活に多大な共感をもって関与している点である。ある男性が地位への執着から供犠交換儀礼の実現に奔走する様子をはじめ、著者は村での出来事に研究者としての眼を注ぐ一方、同じ人間として一喜一憂しつつ巻き込まれていく。ある時は感情移入のあまり、性的禁忌の罪で社会的に追い詰められた女性を必死で弁護するという行為にすら及ぶ。彼はただ情熱をもって参与し、冷静に記述する。こうして完成した大著において、一見不条理な様々の事象は、著者の透徹した観察眼と記述力によって、「森を食べて生きる」ムノング・ガル族の世界観へとリアルに描き出される。その一方で、コンドミナス自身の存在が村

入江幸男（いりえ・ゆきお）

1953年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。文学博士（大阪大学）。大阪樟蔭女子大学などをへて大阪大学大学院文学研究科助教授。著書に、『ボランティア学を学ぶ人のために』（世界思想社）、『コミュニケーション理論の射程』（ナカニシヤ出版）、『ドイツ観念論の実践哲学研究』（弘文堂）など。

キーワードを読み解くためのブックガイド 3

R・K・マートン『社会理論と機能分析』（青木書店、1969）

J・I・キツセ／M・B・スペクター『社会問題の構築　ラベリング理論をこえて』（マルジュ社、1990）

アーサー・C・ダント『物語としての歴史』（国文社、1989）

中河伸俊『社会問題の社会学　構築主義アプローチの新展開』（世界思想社）

出来事を伝えるメディアとは？――出来事の未来

渥美：震災でも語り部という人がいらっしゃいます。毎回語るのはしんどいからビデオを撮ると良いのではないかといつい思ってしまいます。広島でも語り部がビデオに出てくる。しかし同じ語りでもライブとビデオでは随分違います。「語り」とは、トランスクリプトとして記録されるものだけではなくて、語りの場全体を含んでいると思います。本人たちも資料になったものと生きた語りとは違うとおっしゃると思いますが、それをどう再構成するか。何が抜け落ちているかは、われわれが見ても分からない。そこになにがあるのかが気になります。また、たとえば頑なにビデオを拒否されるというところに、捨てきれない何かがあるのではないかとも思います。他方で、演劇にされる場合もあって、その場合は突き詰めた言葉で台詞として出していかれる。

本間：演劇といえば、何か悲惨な経験というものがもともとそれぞれあって、物語が作られて、それらが時代や地域の隔たりを経て全然違うものになっていくということますよね。変形されながら残っていくもの。たとえば童話や寓話などがそうです。そういうかたちでの未来への展望というのはありますか？

渥美：もちろんそこに展望を持っておられる方はいらっしゃって、面白いなと感じています。それは学者が抽象化する作業と似ていると思います。また、演劇はそれを見る目を持った人がいると随分違うように、後世につたえるためにはリテラシーがどう伝わっていくかを考えなければならないと思います。

三谷：メディアの問題は非常に重要で、ビデオとか音声とかいろいろなものを活用しての過去の再構成というのが、歴史学でも大きな課題になってきていますね。活字メディア以外のメディアを媒体にする歴史学がどう展開されるべきなのかという問題になると思います。

桃木：その点はヨーロッパ人が先鞭をつけて、最近ようやく日本でも議論されるようになってきました。博物館との結びつきでも、真剣な議論が行われるようになってきました。従来ですと歴史学的な表現と文学的な表現の境目をどう考えるかというような議論で終わっていましたが、今やもっと多様なビジュアル媒体などが意識されるようになってきて、絵画史も盛んになってきました。すごく平たい歴史を継承することも含めて、かなり総合的に考えないと、歴史教育一般ができなくなってきているわけです。

渥美：災害にまつわる資料館などにもよく行きますが、揺れたり、光ったりして3D映像など迫力があります。もちろんそれは私自身被災経験のなかで見たものではありません。では誰の目で見ているのか。カードを入れると被害に遭われた方の顔が出てくる装置があったりします。このような現代的なメディアもありますが、詩や演劇や音楽もメディアですよね。そういうところをもう少し振り返るべきかなと博物館なんかを訪れると私は感じています。

本間：出来事を記述していく時にメディアが多様化して再現性などが強調されることや、それ伴って、すべてをデータベース化して参照可能にすることについてはいかがですか？

スタッフ・村人こぞって撮影会場に向かうところ。文中のハプニングは、この前に起こる。（2002年10月3日撮影）

豚・鶏・卵など、毎晩数品の美味しい食事が私たちに提供される。やはり村人にとっては「盆と正月が一緒にきた」ような食事なのだろうか。とりあえず「調査データ」として毎食前に撮影。（2002年10月2日撮影）

ではひとつの「出来事」であり、確実に周囲へ影響を与えていることも怠りなく記述されている。まさに生きた文化のドキュメンテーションである。

RVMVの限られた調査期間では当然、コンドミナスが一年間にわたる濃い生活体験を経て書き上げた厚い民族誌に匹敵するものは望めまい。短期間で成果を求める切迫感は、予定調和を好み、不条理を恐れる。しかし慌しさのなか、ふとした亀裂から文化のリアリティーがこぼれる瞬間が確かにある。崇りを恐れて蹲った男性のように。もしこうしたリアリティーを、「映像による民族誌」として追求したらどうなるだろう。しかもコンドミナスのように、撮影者自身が撮影行為の主体かつ客体となるまで、対象文化に肉迫したら。だが気になるのは、あの時二人のシャーマンを怯えさせた、カメラという「眼」の威力だ。たとえ正確な文化の記述に徹しても、この過剰な力を持つ装置自体、はたして現地でペンと同様のさりげない存在にとどまり得るのだろうか？ 私の思いは、さらに複雑に広がっている。

篠田暁子（しのだ・あきこ）

1972年生まれ。1996年慶応義塾大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒業。2001年大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程修了。同大学院芸術文化研究科の助手を経て、2003年度より大阪大学COE研究員。専門は民族音楽学（東南アジアの芸能文化）。

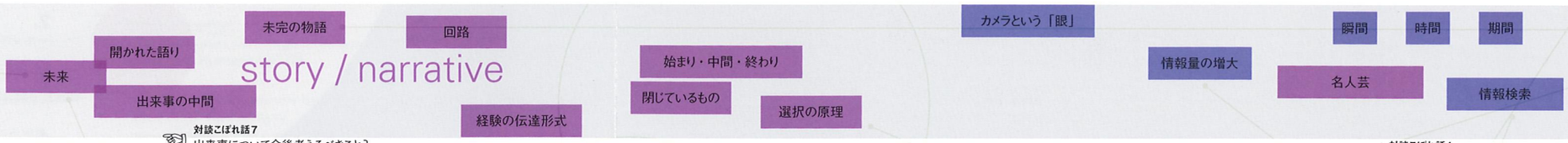
キーワードを読み解くためのブックガイド 4

伊藤俊治・港千尋（編）『映像人類学の冒険』（せりか書房、1999）

ジョルジュ・コンドミナス『森を食べる人々―ベトナム高地、ムノング・ガル族のサル・ルク村で石の精霊ゴオの森を食べた年の記録』（紀伊國屋書店、1993）
（原著：*Nous Avons Mange La Foret. de la Pierre-Genie Goo* / Georges Condominas. Paris : Mercvre de France, 1957）

岡真理『記憶／物語』（岩波書店、2000）

ホワイトヘッド『過程と実在（上）』（松籟社、1984）



対談こぼれ話1
方法か「名人芸」か？

桃木：文献だけで、あるいは黒板に書くだけで授業をやっていた時代に比べればとても良い時代になった。それだけにそこで選ばなければならないし、自分で組み立てなければ結局使い物にならないということはますます大きいですね。ただ、たんにメディアを使っていればいいという時代はもう終わっています。またデータベース化することで、非常に広い範囲まで調べられるようになったのはものすごく良いことだと思います。しかし、それには限界があって、名人芸しかないという話になるのですが、たとえば、将棋というゲームはいまだにコンピュータが人間に勝てないそうですよね。チェスや囲碁は勝てるけれども。おそらくそういう領域というのは、永遠にあるだろうと。領域によってそういうことはあるだろうと思います。

渥美：データベースが大きくなることに関しては、それだけでは手放しでバラ色の未来は感じません。データベースというと容量で話をされますが、容量が大きくなるという話でごまかされてはいけないと思います。フィールドワークで現場すべて記録してこいと言われても、何が現場かという問題が出てくるのと同じです。

桃木：事実上、すべて記録することなど不可能ですし。

三谷：データベースが大きくなると逆に出来事性、物語性をどうやって構築するかという力が大きく働いて、セレクトの原理が重要になりますよね。選んで配列するという操作になりますから。結局出来事というのは始まりがあって、中間があって、終りがあって、閉じているものとして、一連の事件の経過を整理して提示するという仕方です。それは歴史学がやっても文学がやっても同じことをやっているわけで、人間が経験を伝達するというときのもっとも基本的な形式だと思う。それほど深く物語的な経験の伝達行動がわれわれの中にインプットされていて、それによってかなりの部分が規定されていると思います。

渥美：私の分野は、始まり、中間、終りがあって、さらに終りから先へどうして行くかという部分に興味がある分野なのかもしれません。それはまた新しい始まりでもあるのですが。どっちを見るかというと、ひとつの出来事が終わったかのように見えたときに次はどうするのかというところ、つまり出来事の中間から考えていきたいと思います。

三谷：それはまさに、次の物語が未来へ向けて構想される場所だと思います。

対談こぼれ話7
出来事について今後考えるべきこと？

一同：どうもありがとうございました。

桃木至朗（ももき・しろう）
P4写真右

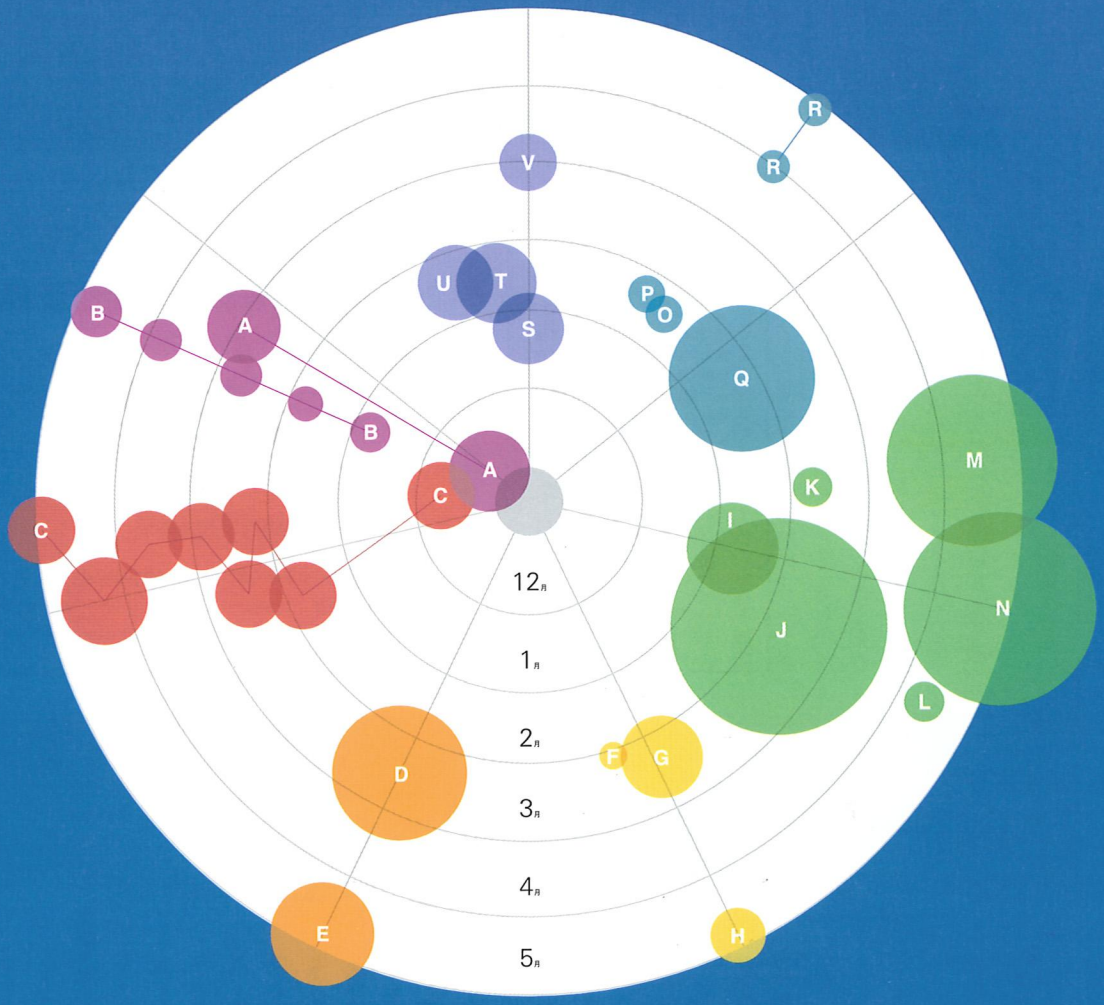
1955年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程中途退学。京都大学、大阪外国語大学などをへて、大阪大学大学院文学研究科教授（東南アジア史/アジア海域史）。著書に、『歴史世界としての東南アジア』（山川出版社）、『ベトナムの事典』（同朋舎）、『チャンパ―歴史・末裔・建築』（めこん）など。

渥美公秀（あつみ・ともひで）
P4写真左

1961年生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科博士課程修了。心理学博士（ミシガン大学）。神戸大学をへて大阪大学大学院人間科学研究科助教授（ボランティア人間学）。著書に、『心理学者が見た阪神大震災』（ナカニシヤ出版）、『ボランティアの知―実践としてのボランティア研究』（大阪大学出版会）など。

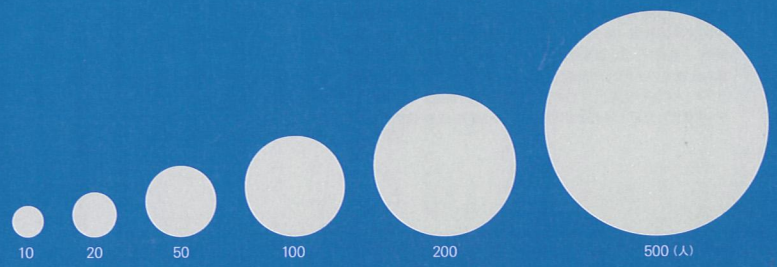
大阪大学 21世紀COE「インターフェイスの人文学」活動状況

Interface Humanities Event Map
2002.12-2003.5



- シルクロードと世界史
- トランスナショナリティ研究
- イメージとしての〈日本〉
- 言語の接触と混交
- 映像人文学
- 臨床と対話
- 岐路に立つ人文科学

中心から外に向かう軸：時間の流れ
円の数：イベントの回数
円の位置：イベントどうしの関連度
円の大きさ：イベント参加人数（登壇者＋聴衆）



Interface Humanities Event Pick Up
2002.12-2003.5

シルクロードと世界史

A 資料の読解から中央アジアを読み解く
中央アジア学フォーラム 2002.12.7, 2003.3.29

B 海から見たアジアの歴史と史料
「海域アジア史研究会」月例会 2003.1.25, 2.22, 3.22, 4.26, 5.24

トランスナショナリティ研究

C 気鋭の講師陣による連続セミナー
トランスナショナリティ研究セミナー（第 1 回〜第 8 回）2002.12.20, 2003.2.21, 3.6, 3.14, 3.28, 4.18, 5.9, 5.30

イメージとしての〈日本〉

D 留学生、海外の研究者たちが世界の中の日本文学を語る
「日本文学国際研究会」基調報告とシンポジウム 2003.3.16

E マンガが映す各国の社会
「イメージとしての〈日本〉」研究プロジェクト 第 1 回ワークショップ
それぞれのマンガ体験、それぞれの語りの位置ーマンガの語り方・国際比較研究ー 2003.5.26

言語の接触と混交

F 地域から日本語を介して世界へ
言語文化研究科　座談会「地域社会における日本語教育」2003.3.3

G ブラジル日系社会からみた日本語
国際研究会「越境する日本語ーブラジル日系社会の言語をめぐって」2003.3.11

H カナダの多言語社会の実態
Some Aspects of Multicultural and Multilingual Dimension in Canada 2003.5.27

映像人文学

I 「ドキュメンテーション」最前線
シンポジウム「表演芸術における映像記録化」2003.2.8

J グラフィック・デザインの過去・現在・未来
第3回国際デザイン史フォーラム「画像と文字」2003.3.8, 9

K 研究者のための実践的講座
人文学者による映像記録化のためのビデオ撮影入門半日集中ワークショップ 2003.3.10

L メディアと視覚言語
第1回メディア・デザイン・インターカルチャー論合同研究会 2003.5.12

M フィールドワークからの報告
音とかたち（その2）2002年度 RVMV ベトナム少数民族文化遺産の調査報告 2002.5.13

N 中欧に香り立つ歴史と文化
懐徳堂春季講座　第105回　中欧三都市物語ー都市の景観と文化ー 2003.5.28, 29, 30

臨床と対話

O オーストリアからの報告
講演会（生命倫理）2003.2.17

P 新しい倫理教育を目指して
講演会（ソクラティク・ダイアローグ）2003.2.20

Q 対話によって築かれる「場」とは何か
第1回対話シンポジウムー対話を促進する方策と、場の構築のための連携ー 2003.2.23

R 若手研究者による「対話」の冒険
第1回〜第2回「記憶と対話」研究会 2003.5.1, 29

岐路に立つ人文科学

S ユゴーの現代的意義を語り尽くす
講演会「ヴィクトル・ユゴー、パリの王様の真実ー生誕200年にあたってー」2003.1.25

T 現代韓国史からの提言
ワークショップ「韓国における近代化と知識人の位置」2003.2.13, 14

U 韓国におけるドイツ文学の状況
ワークショップ「人文科学の危機（ドイツ文学を例に）」2003.2.17, 18

V 歴史学の今日を語る
講演会「グローバル化時代の歴史」2003.4.1